

～インプラントとの使い分け～

巻頭

(山崎 浩一, 中野 隆夫) 上歯と下歯のインプラント治療の進め方・ポイント

(山崎 浩一, 中野 隆夫) 上歯と下歯のインプラント治療の進め方・ポイント

下地 勲

今回は歯の究極の保存治療としての歯の再植と移植について、これから始めようとお考えの先生方、あるいは既に経験されて、種々の疑問点をお持ちの先生方のためにお話します。

まず、当然、必要となるのが、基礎の知識ですが、理論を羅列するのではなく退屈にならない程度で、最低限必要な事項を、実際の臨床と具体的に結びつけてわかりやすく解説致します。

次に実際にスムーズに日常臨床導入していただくために、すぐにでも取り組めるやさしいケースから難症例といわれるケースまで、多くの症例を段階的に提示し、自然にレベルアップしていけるような実践的な内容に致しました。また、移植だけではなく、エンド、ペリオ、両者の相関、穿孔など臨床全般に及ぶ歯根膜の活用例についても基礎の知見と結びつけてお話しします。

たしかに、最近のインプラントの普及はめざましいものがあり、当医院でも導入以来 20 年以上たち、慎重にかつ長期に経過観察を行っていますが（対合歯、隣在歯などに及ぼす影響は別にして）インプラント自体の失敗例をほとんど経験しておりません。しかし、一方で、その高い成功率の影響もあってか、歯科界全体で歯牙保全のための努力が以前に比べて、薄れていく傾向がみられることは誠に残念です。このことは若い臨床家に手本を示さなければならない筈の内外の臨床誌上および講演会においてさえ強く感じられ、また日常臨床においても、努力すれば十分に保存できるケースが安易に抜歯と診断され、インプラントもしくは他の処置をすすめられたと Second opinion を求める患者さんが急増している現実からも感じられます。さらには臨床雑誌等に掲載される講演会、講習会の案内もインプラント関連が圧倒的に多く、天然歯の保存療法をめざした内容は非常に少ないのが現状であり、今後の歯科医療の動向はこのままでいいのだろうかと不安をおぼえます。

症例の選択にあたっては、歯科臨床における個々の処置の妥当性は長期的な予後がどうかにかかっていることから短期経過症例はとりあげず、原則として 15 年以上経過したケースをもとに述べます。

おもな CONTENT

- ◆ どうしても必要な基礎の知識
- ◆ どのようなケースから始め、レベルアップしていけばよいか?
- ◆ 顎堤が吸収した難症例への易しい対応
- ◆ 移植の有効な欠損歯列=歯列の改変
- ◆ インプラントに対する利点と使い分け

参考文献 (書籍に限定)

単著

「入門・自家歯牙移植 -理論と臨床-」 (1995年, 永末書店)

「歯根膜による再生治療 -インプラントを考える前に-」 (1999年, 医歯薬出版)

「月刊 下地 勲; 歯はここまで残せる -セカンドオピニオンの実践-」 (2011年, デンタルダイヤモンド社)

「歯の再植・移植を始めよう」 (2016年, 医歯薬出版社より発行予定)

編著

「歯の長期保存の臨床 -私はこうして歯を守る-」 (2013年, デンタルダイヤモンド増刊、デンタルダイヤモンド社)

「歯根膜活用術 -歯と歯列を守るための-」 2011年, 歯界展望別冊、医歯薬出版)

「自家歯牙移植の臨床像」 (編著) (1996年, クインテッセンス出版)

共著

「治癒の病理-臨床編・第3巻・歯の移植・再植」 (1995年, 医歯薬出版) など多数

主な訳書

「歯牙再植と移植の治療学」 (共訳. 著者 Jens O. Andreasen, 1993年, クインテッセンス 出版) など